

「かいろす」第60号別冊
令和4年11月15日発行

ナチス・ドイツにおける「リクエスト音楽会」について
—メディアによる「民族共同体」の形成—

竹 岡 健 一
(Ken-ichi TAKEOKA)

(Kairos 60)

Kairos-Gesellschaft für Germanistik

Fukuoka Japan 2022

ナチス・ドイツにおける「リクエスト音楽会」について

— メディアによる「民族共同体」の形成 —

竹 岡 健 一

はじめに

本稿は、ナチス時代にラジオ番組として始まり、書籍化、映画化もされて人気を博した「リクエスト音楽会」について詳しく考察することによって、メディアを通じて形成された「民族共同体」の特色を明らかにしようとするものである。

1. 映画『リクエスト音楽会』

映画『リクエスト音楽会』(*Wunschkonzert*, 1940) は、ユニヴェルズム映画株式会社 (Universum-Film AG; 通称ウーファ) によって製作され、1940年12月30日にベルリンで封切られた。¹⁾ 監督はエドゥアルト・フォン・ボルゾディ (Eduard von Borsody)、主演俳優はカール・ラダッツ (Carl Raddatz) とイルゼ・ヴェルナー (Ilse Werner)、音楽の担当は娯楽音楽の作曲家として有名なヴェルナー・ボッホマン (Werner Bochmann)、上映時間は1時間43分である。図1は映画のポ

* 本稿は JSPS 科研費 JP20K00500 の助成を受けた研究成果の一部である。また、本稿の内容については、「かいろすの会」研究発表会 (2022年7月30日 於九州大学伊都キャンパス) において口頭発表を行った。

1) 本映画は、the Internet Archive のサイトにより視聴が可能である。https://archive.org/details/wunschkonzert-1940?form=MY01SV&OCID=MY01SV (最終閲覧日: 2022年5月11日) なお、本映画、およびラジオ番組の「リクエスト音楽会」については、次の文献も参考にした。Hans-Jörg Koch: *Wunschkonzert. Unterhaltungsmusik und Propaganda im Rundfunk des Dritten Reichs*. Mit einem Vorwort von Hans-Ulrich Wehler. Ares Verlag, Graz 2006; Uta C. Schmidt: *Die mediale Inszenierung der „Volksgemeinschaft“*. *Rundfunk im Nationalismus*. In: *Sozialwissenschaftliche Informationen*. 31 (3), 2002, S. 15-24; David Bathrick: *Radio und Film für ein modernes Deutschland: Das NS-Wunschkonzert*. In: *Dschungel Großstadt: Kino und Modernisierung*. Hrsg. von Irmbert Schenk. Schüren Verlag, Marburg 1999, S. 112-131; Monika Pater: *Rundfunkangebote*. In: *Zuhören und Gehörtwerden I. Radio im Nationalsozialismus zwischen Lenkung und Ablenkung*. Hrsg. von Inge MarBolek/Adelheid von Saldern. edition diskord. Tübingen 1998, S. 129-241, bes. S. 224-241. 今井康雄「アドルフ・ライヒヴァインのメディア教育学——教育的抵抗とは何か」(『東京大学大学院教育学研究科紀要』第44号, 2004年, 1-19ページ)。Wikipedia: *Wunschkonzert*: https://de.wikipedia.org/wiki/Wunschkonzert_(1940)?msclid=b4e85637ce5d11eca75d984ce13687db (最終閲覧日: 2022年5月11日)

スターであるが、²⁾ この映画は戦争終結までに少なくとも2,300万人の観客を集め、ロルフ・ハンゼン (Rolf Hansen) 監督の『大いなる愛』(Die große Liebe, 1942) に次いで、ナチス時代の娯楽映画の大ヒット作となった。そのストーリーはおおよそ次のようなものである。

1936年夏、ベルリン・オリンピックの開会式の日、19歳の娘インゲ・ヴァーグナーは、叔母が二人のチケットを忘れて家に取りに帰っている間に、空軍少尉のヘルベルト・コッホと知り合う。開会式をともに観戦した二人は愛し合い、結婚の約束をする。だが、わずか三日後、ヘルベルトはコンドル義勇軍の一員としてスペインへ派遣される。極秘の任務のため、彼はインゲに説明することができず、自分を信じてほしいとだけ言い残して出発する。



図 1

やがて三年が過ぎ、ドイツでは、1939年9月の第二次世界大戦勃発とともに、男たちが出征してゆく。その中には、肉屋やパン屋の主人のほかに、身ごもった妻のことを気遣う若い教師もいれば、別れにあたって家庭のグランドピアノでベートーベンの『悲愴』を弾く若い音楽家もいる。インゲの学友ヘルムート・ヴィンクラーも出征兵士の一人であるが、彼はインゲに求婚して断られたものの、望みを捨てきれないでいた。インゲは今もなお、1936年に突然分かれて以後消息がわからないヘルベルトのことを慕っていたのである。

前線では、兵士らがラジオで「国防軍のためのリクエスト音楽会」を聴くことを楽しみにしている。大尉に昇進し、ハンブルク近郊の空軍基地にいるヘルベルトは、整備兵らに乞われて、インゲとの思い出にオリンピックのファンファーレをリクエストする。同じ頃、ヘルムートはヘルベルトの航空部隊に配属される。ここで、ベルリンのラジオ局のホールで催されている第8回リクエスト音楽会の場面が挿入される。開会のファンファーレと司会者の挨拶の後、前線と空軍基地でラジオを聴く兵士らの様子が映される。丁度インゲもそれを聴いており、まさにそのときヘルベルトのリクエストが読み上げられ、オリンピックのファンファーレが流れる。彼女は放送局を訪ねてヘルベルトの居場所を突き止め、二人の間に文通が始まる。

一方、西部戦線では、肉屋とパン屋が偵察中に捕まえた豚をリクエスト音楽会

2) Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 97.

に寄付することが決定される。またその頃、ヘルベルトとヘルムートは友情を結ぶ。ヘルムートとの会話の中でヘルベルトは、スペインでの任務で負傷した後、ベルリン・オリンピックの折に出会った女性に二度手紙を送ったが、転居していたため届かず諦めたこと、ところが、二日前に彼女から手紙が届き、三年ぶりに会うことになったことを話す。だが、この時点では、彼らは自分たちが同じ女性を愛していることに気づいていない。インゲはヘルベルトと会うためにハンブルクへ向かう。

しかし、ヘルベルトは、インゲに会いに出かける直前に偵察飛行に出かけなければならない。偵察中、地上からの射撃によってヘルムートが負傷し、飛行機は海上に不時着するが、Uボートによって救出される。そして、飛行機からヘルムートの持ち物を持ちだそうとしたとき、ヘルベルトはヘルムートがインゲの写真を持っていることに気がつき、二人が婚約していると勘違いする。一方、ハンブルクに着いたインゲはホテルで待つものの、ヘルベルトが現われないため、空軍基地へ出かけることにする。

ここで、場面は夜霧の中での戦闘に変わる。若い音楽家は、無人地帯で道に迷った偵察隊を救うため、集合場所に決められていた教会のパイプオルガンで賛美歌を演奏する。それによって仲間は助かるが、教会は敵の砲兵隊の攻撃を受け、彼自身は命を落とす。

インゲは空軍基地でヘルムートが負傷したことを知り、野戦病院へ向かうが、同じくヘルムートの見舞いに来たヘルベルトから別れを告げられる。その頃、肉屋とパン屋は豚を連れてベルリンのドイツ放送局に到着し、リクエスト音楽会のアナウンサーと打ち合わせをしている。インゲはヘルベルトの隊員に彼との面会の取り次ぎを求める。その時、丁度第10回リクエスト音楽会が始まり、ヘルムートも病室で耳を傾ける。

場面は音楽会に変わり、開会のファンファーレの後、冒頭、総司会者ゲデツケによって聴取者からの寄付が紹介される。続いて、オーケストラの演奏を背景として、ホールの観客やオーケストラの演奏の様子、家庭での聴取や前線兵士らの聴取の様子、および工場などで仕事に携わりながら聴いている人びとの様子が映される。その後、ホールでの演奏会に戻り、マリカ・レック (Marika Röck) の『五月のある夜に』 (*In einer Nacht im Mai*)、ハンス・ブラウゼヴェッター (Hans Brausewetter)、ハインツ・リューマン (Heinz Rühmann)、およびヨーゼフ・ズーパー (Josef Sieber) の『そんなことで船乗りは動じない』 (*Das kann doch einen Seemann nicht erschüttern*)、オイゲン・ヨッフム指揮、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 (Philharmonisches Orchester Berlin, Eugen Jochum [Dirigent]) の『フィガロの結婚序曲』 (*Ouverture zur Oper Figaros Hochzeit*) が演奏される。

演奏の途中、場面は病室に変わり、ヘルムートとインゲの会話の中で、ヘルベルトの誤解の原因が明らかになる。一方、音楽会では、フランスの豚の寄付がアナウンスされ、肉屋とパン屋が登場した後、ヴァイス・フレドゥル (Weiß Ferdl) の『インテリでなくてよかった』(*Bin ich froh, ich bin kein Intellektueller*)、アルベルト・ブロイ (Albert Bräu) のクラリネットのソロ演奏、パウル・ヘルビガー (Paul Hörbiger) の『きみはアポローナー』(*Apoloner, Apoloner bist Du*) が演奏される。

続いて、ドイツ兵の息子の誕生が報告され、前線でラジオを聴いていた教師が仲間から祝福される様子が映され、少女らの『眠れ、よい子よ』(*Schlafe, mein Prinzchen, schlaf ein*) の合唱を背景として、家庭での聴取の様子や、前線でラジオを聴く教師の様子と、赤ちゃんと一緒にベッドに横たわる教師の妻の幸せそうな様子が交互に映される。

しかし、それに続いて、一人の母親がラジオ局に電話を寄せたことが報告される。息子は戦死したが、仲間が彼の認識票と所持品を母親に送った。そのノートの最後のページには、彼が好きだった歌が記されていた。それを受けて、音楽会の締めくくりに、ヴィルヘルム・シュトリエンツ (Wilhelm Strienz) が、その母親のために、『おやすみ、母さん』(*Gute Nacht, Mutter!*) を歌う。途中、兵士の自宅に飾られた写真によって、それが教会で命を落とした音楽家だとわかり、歌を聴きながら涙する母親の姿も映される。

翌日、ヘルムートが病室でヘルベルトとインゲを引きあわせる。ヘルベルトの誤解も解け、二人は結ばれる。と同時に、再びリクエスト音楽会の場面へ戻り、『我らイギリスへ進軍す』(*Denn wir fahren gegen Engelland*) の勇ましい歌唱の中、軍艦や戦闘機とハーケンクロイツの旗とともに、映画は終わる。

以上が『リクエスト音楽会』の概要であるが、このように見ると、この映画では、題名ともなっている音楽会が中心的な役割を担っていることがわかる。それは、主人公の男女が再会する契機となっているだけでなく、前線と故郷の繋がりを保ち、国民同胞の一体感を醸成する媒体として機能しているのである。ところで、映画でもその名があげられている「国防軍のためのリクエスト音楽会」は決して架空のものではない。第8回と第10回の放送の場面では、実際に催され、放送された音楽会の録画が利用されているし、その他の筋書きにも実際の音楽会の内容が反映されている。つまり、この映画は恋愛映画であるだけでなく、「国防軍のためのリクエスト音楽会」というラジオ番組そのものの映画化ともなっているのである。それどころか、ウータ・C・シュミットによれば、実際の音楽会の映像の挿入なしには、そもそもこの映画の成功はあり得なかった。

その(映画『リクエスト音楽会』=引用者注)成功は、戦争中の恋愛をめ

ぐるフィクションの筋が現実のラジオ番組である「リクエスト音楽会」と巧妙に結びつけられたことに基づいている。目に見えないラジオの電波が離れ離れになった恋人の間にいわば形而上学的な結びつきをもたらし得るという幻想が、様々なレベルで育まれるのである。³⁾

では、このラジオ番組はいったいどのようなものだったのであろう。

2. ラジオ番組「リクエスト音楽会」

ラジオの音楽リクエスト番組 (Wunschkonzert) は、ラジオそのものと同じくらい古いと言われる。すでに1924年には、南西ドイツ・ラジオ局 (Südwestdeutsche Rundfunkgesellschaft) で「リクエストの夕べ」(Wunschabend) が、東ドイツ・ラジオ局 (Ostdeutsche Rundfunk AG) で「リクエストの午後」(Wunschnachmittag) が放送されていた。だが、第三帝国時代に入り、この番組形式にひとつの新しい要素が加わった。1935年のクリスマスに、ドイツ放送局 (Deutschlandsender) の娯楽放送の間に、ひとりの聴取者が、バイオリニストのバルナバス・フォン・ゲッツィ (Barnabas von Géczy) の曲をリクエストし、もし叶えられたなら、社会福祉団体である国民社会主義公共福祉 (Nationalsozialistische Volkswohlfahrt = NSV) が貧困救済のために行っていた慈善募金活動である「冬期救済事業」(Winterhilfswerk) に20マルクの寄付をすると申し出た。そして、アナウンサーのハインツ・ゲデッケがこのリクエストに応えたところ、数多くの聴取者から同じようなリクエストと寄付の申し出が寄せられたのであった。こうして、音楽のリクエストと「冬期救済事業」への寄付を組み合わせた番組「冬期救済事業のためのリクエスト音楽会」(Wunschkonzert für das Winterhilfswerk) が誕生することになったのである。

この新しい番組の最初の放送は1936年1月14日の20時から24時に設定されたが、「ドイツ放送局が冬期救済事業に奉仕〈あなたはリクエストし——わたしたちは演奏し、たくさんの人々が救われる！〉」⁴⁾とのキャッチフレーズの下、「ラジオで実現された初のアイデア」⁵⁾として大きく報道された結果、およそ1,200件ものリクエストが寄せられた。そして、ベルリンのシャルロッテンブルク地区のマズーレンアレーにある「ラジオ放送局」(Haus des Rundfunks) で約1,200人の聴衆を前に催されたコンサートが、実況放送された。マスコミの反響も肯定的で、「番組の構成のために聴取者を招く、と同時に冬期救済事業の新たな成功を手に入れるという独創的なアイデアは、生産的であることが明らかとなった」⁶⁾「火曜日の晩、

3) Uta C. Schmidt: A. a. O., S. 19.

4) *Funkwoche*, Heft 2/1936. Zitiert nach Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 100.

5) *Leipziger Neueste Nachrichten*, 14. 1. 1936. Zitiert nach ebenda.

少しばかり延長された時間のあいだ、ドイツ全体が一体化し、ただ一つの大きな家族となった」⁷⁾などと評価された。同番組は、1月26日には第2回目、続いて第3回目を実施され、この年の後半以降は、冬季の半年間に、17時（ときには16時）から20時にかけて、4回実施された。

では、この番組の内容は具体的にどのようなものだったのであろう。プログラムは、おおよそ次のような3つの部分から成っていた。⁸⁾

まず、第1部において、番組は目印となるファンファーレと挨拶の言葉によって開始され、続いて総統のお気に入りの行進曲である『バーデンヴァイラー行進曲』(*Badenweiler Marsch*)が奏でられた。その後、19時までは、行進曲、室内楽、コーラス、序曲、オペラのアリア、民謡、軍歌などが演奏され、とりわけワーグナー、ベートーベン、モーツァルト、ブルックナー、ヘンデルといった人気のあるクラシック音楽が多く取り上げられた。

第2部は、軽い娯楽音楽によって特徴づけられた。主にレコードのヒットソング、ダンスヒット曲、有名な芸術家のライブ演奏などである。

第3部は、ワルツ、コーラス、行進曲、および厳粛な音楽が演奏され、最も多いリクエストが叶えられた。また、途中、詩の朗読、寸劇、軍事的・私的なアナウンスなどによって緊張がほぐされたが、それらは、寄付をしたもののリクエストが叶えられない聴取者のためのさやかな埋め合わせと考えられていた。放送の終わりには、数多くの寄付者の名があげられた。

このようなリクエスト音楽会には、当時の著名な音楽家、俳優、オーケストラが多数出演した。例えば、俳優のハインリヒ・ゲオルゲ (Heinrich George)、パウル・ヘルビガー、ハンス・モーザー (Hans Moser)、ハインツ・リューマン、テオ・リングン (Theo Linggen)、女優のイルゼ・ヴェルナー、グレーテ・ヴァイザー (Grethe Weiser)、歌手のツァラー・レアンダー (Zarah Leander)、ララ・アンデルセン (Lale Andersen)、道化師のチャーリー・リベル (Charlie Rivel)、ダンサーのマリカ・レック、およびバイオリニストのバルナバス・フォン・ゲッツィなどである。⁹⁾

繰り返しになるが、ラジオにおける音楽リクエスト番組そのものは、1930年代にはもはや特別なものではなく、「冬期救済事業のためのリクエスト音楽会」の新しさは、リクエストと寄付の結びつきにあった。¹⁰⁾ 聴取者がお金か物の寄付を直

6) *Berliner Lokalanzeiger*, 15. 1. 1936. Zitiert nach ebenda, S. 101f.

7) *Kreuz-Zeitung*, 15. 1. 1936. Zitiert nach ebenda, S. 102.

8) Vgl. Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 116.

9) Vgl. Christian Adam: *Lesen unter Hitler. Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich*. Galiani, Berlin 2010, S. 109.

接ドイツ放送局に送るか、または国民社会主義公共福祉の地方団体に寄付を届けたことを証明する書類を送ることと引き換えに、リクエストが叶えられたのである。1936年1月から1939年3月までの間になされた計14回の放送を通じて、「およそ100万人の聴取者のリクエスト」が叶えられ、ひとつひとつは少額の寄付から、「60万マルクという金額」(21)¹⁰⁾が「冬期救済事業」に送金されたのであった。ちなみに、お金以外の寄付としては、ボウシインコ、セキセイインコ、ポリシュウサギ、テンジクネズミ（ラジオ局に届く間に数が倍になっていた）、犬、アライグマ、ポニーといった動物や、金の結婚指輪、バイオリン製作者の自作のバイオリンなどがあり、それらは競売にかけて換金された（Vgl. 22）。また、聴取者から送られた手紙には、例えば次にあげるように、しばしば寄付の動機が綴られていた。

私たち機械工場の仲間は、ある労働者の同僚のために、彼が失くした賃金を埋め合わせましたが、そのお金は、後で発見されました。そこで、私たちは、そのお金をあなた方にお贈りすることに決めました。(24)

ここに添えた12マルクは、貧しい人々のなかでも最も貧しい者たちの贈物です。82歳までの24人の老いた婦人が、保養所で過ごした4週間という、彼女らの人生で最も素晴らしい日々への感謝として、それをお譲りします。大変慎ましく暮らさねばならない彼女らは、人生で初めての休暇に、冬季救済事業が助けようとしており、また助けねばならない人々のことを思ったのです。(24f.)

このように寄付をした人たちの私的な境遇も窺わせる手紙は、番組で読み上げられることによって多数の聴取者に感銘を与え、新たな寄付行為へと誘った。1939年3月の放送終了にあたり、ハインリヒ・ゲオルゲは、ラジオを「人々の愛と困窮の仲介者」(29)と呼んだが、この言葉はまさに、「冬期救済事業のためのリクエスト音楽会」という番組が果たした役割をよく表している。

なお、寄付金の配分は国民社会主義公共福祉によって引き受けられたが、その様子は例えば次のようなものであった。

10) Vgl. Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 105.

11) Heinz Goedecke/Wilhelm Krug: *Wir beginnen das Wunschkonzert für die Wehrmacht*. Mit einem Geleitwort von Ministrialdirigent Alfred-Ingemar Berndt. Nibelungen-Verlag. Berlin/Leipzig 1940 (3. unveränderte Auflage 1941 151.-200. Tausend), S. 21. 以下、同書からの引用は、本文中にページ数のみを記す。

水曜日の午後、国民社会主義公共福祉のヴィルマースドルフの家で、100人のそのような母親が贈物を受けとった。母親と子供と明るい灰色の上着を着た帰休兵が、ゲッベルスの妻マグダも参加した大規模な家族の集いの時間に、お茶とケーキに集まった。大管区局長メーラーは、短い挨拶の中で、贈り物が長く連なる机の上にはっきりと見て取ることができ、私たちにあらゆる困難の克服を成功させる真の民族共同体の精神を讃えた。¹²⁾

前後に音楽が演奏され、乳母車、新生児用品、および食糧と商品券が分配されるこの社交的な催しは、「〈民族の自救行為〉」¹³⁾の印象深い例であり、「民族共同体」の精神を如実に示したのであった。

さて、「冬期救済事業のためのリクエスト音楽会」は、1939年の冬季も例年と同じように実施される予定であったが、第二次世界大戦の勃発に伴い、変更を余儀なくされた。というのも、9月1日の開戦後間もなく、気晴らしと娯楽を求める兵士からのリクエストがドイツ放送局に殺到したからである。そのため、早くも9月末、同放送局の局長で、啓蒙宣伝省のラジオ部門の部長でもあったアルフレート＝インゲマル・ベルント (Alfred-Ingemar Berndt) は、全ドイツのラジオを通じて次のように呼びかけねばならなかった。

ドイツ国防軍兵士のみなさん
しばし耳を傾けてください！

4週間にわたり、あなた方東部戦線の兵士は次々と勝利を重ねて進軍しました。4週間前から、西部戦線の兵士は、西方の壁の塹壕で、ドイツの国境の忠実な見張りをしました。4週間の間、気高いドイツの空軍は、ベルリンで戦闘を行うと世界に吹聴する敵を打ち砕くことに貢献しました。

西部戦線や湾岸や大洋にいるあなた方兵士は、ラジオを通じて、東部戦線でのあなた方の同僚の勝利について、故郷の出来事について耳にしました。東部戦線にいるあなた方兵士にとって、この4週間、あなた方の嵐のような進軍のために野戦郵便が届かないという限りで、ラジオが故郷との唯一の結びつきでした。共に故郷からのニュースを聞き、放送を通じて偉大なドイツの祖国と結びつくために、あなた方は幾度となく晩にどこかで受信機の前に集まったことでしょう。ブルザ川、サン川、ヴァイクセル川、ナレフ川の畔

12) VB, 15. 2. 1940. Zitiert nach Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 129.

13) Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 129.

のどこかで、あなた方は総統がドイツ民族に話すのを聞き、その瞬間とても誇らしく、幸福でした。したがって、ドイツのラジオがあなた方にとってこの時期に特別に愛すべき友であったのも、不思議ではありません。

そのため、あなた方は、ここ数週間に、私たちに多くの野戦郵便を書きました。そして、私たちはこれらの野戦郵便から、繰返し一つのことを受け取りました。すなわち、音楽へのリクエストです。あなた方の多くは、私たちに、あなた方の好きな曲を演奏して欲しいと願いました。この願いを、私たちは——可能な限り——叶えたいと思います。

そこで、1939年10月1日の日曜日、16時から20時に、大ドイツラジオは、国防軍のための最初の大規模なリクエスト音楽会を開催します。

あなた方兵士は、あなた方が聞きたいものを自らリクエストすることができます。私たちは、私たちが必ずしもすべてのリクエストを叶えることができないことを知っています。しかし、最初のリクエスト音楽会には、さらなるリクエスト音楽会が続きます。リクエストが叶えられる人たちには、この機会に家族への挨拶を伝えることもできます。つまり、一等兵ハインツ・ノイマンが故郷の愛する人たちに心からよろしくとのことです、と伝えることができるなら、私たちににとって喜びです。もちろん、部隊や故郷の場所をあげることはできません。そのことは、あなた方ご自身よくご存じでしょう。

それでは兵士のみなさん、次の日曜日にお会いしましょう。私たちは4時間をともに過ごし、私たちのリクエスト音楽会を通じて、前線と故郷をこのうえなく密接に結びつけましょう。(34f. 太字による強調は原文)

こうして10月1日に開催されたリクエスト音楽会は、その名を「国防軍のためのリクエスト音楽会」(Wunschkonzert für die Wehrmacht)へと改められ、冬季救済事業も「戦争冬期救済事業」(Kriegswinterhilfswerk)へと名称変更された。番組は、リクエストの内容の面ではそれまでとさほど変わらなかったが、リクエストは兵士とその家族にしか、ライブ放送への参加も兵士と衛生兵にしか認められず、入場券はベルリンの軍司令部によって配布された。また、10分間の特別番組として「兵士の声」が追加された。野戦郵便を通じて23,117件ものリクエストが届けられた第1回「戦争リクエスト音楽会」において、有名な俳優グスタフ・グリュントゲンス (Gustaf Gründgens) が述べた次のような言葉は、戦時下における娯楽の提供と「故郷と前線の架け橋」¹⁴⁾としての、この娯楽番組のそれまで以上の「凱行進」¹⁵⁾の始まりを意味していた。

14) Ebenda, S. 130.

故郷の境界がとても広がったため、
あなた方兵士は、祖国の防衛のために立っています。
強い、生き生きとした壁として、心と鋼鉄からなる二重の壁として立っています。
そして、あなた方みなを、共通のきずなが取り巻いています。

あなた方がそのために立ち、見張っている故郷が。
故郷は昼も夜も、すべての海の上でも、地下壕でも、
雲の中を飛んでいるときも、あなた方がいつも孤独に故郷のことを考える
無人地帯でも、あなた方のそばにあります。

そして、ひとつの声があなた方の名前を知っており、
この声があなた方の兄弟の名を呼ぶとき、
あなた方はそれが誰の声かを知っています。
あなた方に挨拶をするのは、故郷です。
息子たちのひとりとして忘れることのない故郷です。

この声があなた方を感動させ、
故郷への思いとともにあなた方を導くとき、
あなた方は、たとえどこで孤独にしようとも、
一瞬の間、時間と空間を越えて、
故郷の忠誠と愛を感じるのです。(67)

こうして、放送局のホールの聴衆と、故郷の聴取者と前線にいる兵士が一体となる空間をつくり出した「国防軍のためのリクエスト音楽会」は、1939年末までに、水曜日と日曜日の18時から20時まで、計25回放送された。1940年からは日曜日だけとなったが、3月6日からはベルンブルガー通りのベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の大ホールで開催された。また、国内のすべてのラジオ局がこの番組を放送し、放送網の拡大とも相まって、以前よりもより広範囲の人々が聴取者となった。一方、前線兵士からは、音楽のリクエスト以外にも様々な願いが寄せられた。例えば、ポツダムの衛戍教会（Garnisonkirche）の鐘の音が聞きたい、ビール瓶の栓を抜いたときのプシューという音が聞きたい、入浴中の美女がたてるパシャパシャという音が聞きたいといったものだが、「故郷のメガホン」¹⁶⁾たる

15) Ebenda, S. 109.

番組は逐一それらを叶えた。ちなみに、最後にあげた願いは、女優のイレネ・フォン・マイENDORFF (Irene von Meyendorff) がポウルにためた水を手で叩いて音をたてることで叶えられた。また、前線兵士の中にはむろん病人や負傷者もあり、彼らからもメッセージが寄せられた。

さて、ラジオよ、よく耳を傾けてください。

野戦病院の〈第9号室〉、そこで私たちは再会しました。

前線の5名の同僚で、

私たちのからだはギプスで固定されており、

病院じゅうですでによく知られています。

私たちは〈ギプス戦隊〉と呼ばれているのです。

そのことを、私たちはあなたにお知らせします。

その他の点では、私たちは〈きわめて健康〉だと感じています。

私たちは全世界の平和を願っています。

私たちのために〈星空の下で〉という歌を演奏してください……。 (127)

こうしたリクエストは、しばしば故郷の人々が前線兵士の消息を知る手がかりともなったが、その意味でとりわけ大きな役割を果たしたのは、子供の誕生と兵士の死に関連するコーナーであり、そこではラジオというメディアの情報伝達の迅速性が大きな効果を発揮した。というのも、アナウンサーの声を通じて、兵士は家族から野戦郵便が届くよりも先に子供の誕生を知り、家族は軍からの死亡通知よりも先に兵士の訃報に接したからである。

新たに誕生した「兵士の子供」の告知のコーナーでは、前後に乳児の泣き声が流され、例えば次のような告知がなされた。

イギリスがなおとても不満げな姿を見せ、

私たちを根絶しようと脅かしています。

私たちは一人の戦いの同志を得ます。

あなた方みなを彼を知ります——友人アーデバールです。(71)

1939年11月1日の第10回の放送までに、2,689人の子供の誕生が報告されたが¹⁷⁾、すでに最初の放送の際、これらの喜ばしい報告は大量の寄付によって補完された。

16) Ebenda, S. 118.

17) Vgl. B, 62 DAF 3 Awi-Ztg., 19235, S. 5. Bericht: *Rundfunk und Volksgemeinschaft*. Zitiert nach ebenda, S. 120.

嚙矢をなしたのはフィンランドの聴取者で、彼はこの放送で名をあげられた子供らのすべての母親に、半ポンドのバターを贈ると約束した。これを皮切りに、ベルリンの放送局には、大量の物の寄付が届いた。例えば、乳母車、乳児用クリーム、台所の家具、煙草などである。このような新しく生まれた兵士の子供の告知は、アナウンサーにとっても日常の心地よい課題の一つであり、かつ塹壕にいる父親たちにも慰めを与える効果を持ったのであった。

しかし他方で、早くも放送の初期の段階で、東部戦線で戦死した兵士の母親のために、リクエストが叶えられた。彼女は、ラジオのそばに座って、兵士らの名前を聞いていた。妻や母親に無事息災のメッセージを送る兵士らの名前を。だが、彼女は泣いている。彼女の息子はポーランドのラドムで戦死し、名前が読み上げられる兵士らのなかには含まれないのだ。しかし、彼女は息子の戦友が遺品として送ってくれたノートを戸棚から取り出す。そして、リクエスト音楽会に電話をし、こう伝えるのである。

「ここに、愛する息子のノートがあります。最後のページに、彼がいつもとても好んで歌っていた歌の歌詞が書いてありました。おやすみ、母さん、という歌です。

今、私の息子は戦死し、ポーランドで眠っています。——そしてこの歌詞の言葉が、おそらく私への彼の最後のおやすみの挨拶となるのです。」(44)

それから30分後、その母親は再びラジオのそばに座っている。するとアナウンサーが、母親が伝えたノートの物語を語り、その後沈黙が訪れるが、やがてスピーカーから『おやすみ、母さん』が流れる。そのとき、母親は、彼の息子ヴァルターが「彼女だけのためになく、すべての人々のために戦死した」¹⁸⁾のだということを知らるのである。

おやすみ、母さん、おやすみ
母さんはいつもぼくのことを考えてくれました
ぼくのことを気づかい、苦労しました
晩には子守唄を歌ってくれました
おやすみ、母さん、おやすみ
ぼくはあなたに心配ばかりかけました
母さん、あなたは許し、見守ってくれました

18) Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 124.

おやすみ、母さん、おやすみ

今日母さんが書いた手紙が届きました

ほんの短い母さんの手書きの手紙

でもほくを愛してくれていることは、千マイル向こうから伝わってきました
あなたはほくのすぐそばにおり、ほくはあなたの足もとに座っていました
故郷がとつぜん、幾千の優しい挨拶とともにそばにありました

今日はもう遅く、あなたは疲れています

苦勞と心配が辛かったのです

だから、あなたの息子がここにいて、あなたのために歌を歌います

朝まで眠ってください

おやすみ、母さん¹⁹⁾

まさに、上述の映画に挿入された音楽家の死と重なるエピソードであるが、『おやすみ、母さん』（Text: Erwin Lehnnow, Musik: Werner Bochmann, 1939）は、このとき宮廷歌手ヴィルヘルム・シュトリエンツによって歌われて有名になった。その後、多くの婦人と娘たちは、公式の死亡報告が届くより先に、リクエスト音楽会を通じて夫や息子、兄弟、父親の死を耳にすることがあったが、計報の知らせの後には、しばしばこの「〈慰めの歌〉」²⁰⁾が流された。また、前線兵士が家族へ送る挨拶として、この曲の歌詞が載った絵葉書が数百万枚も製作された。²¹⁾

さらに、この関連では、1939年の死者慰霊日に、有名な俳優マティアス・ヴィーマン（Mathias Wiemann）が、残された婦人らのために語った次のような言葉も想起される。

お母さん、泣いてはいけません

——おいでなさい、あなたは孤独ですから、共に歩みましょう

共に歩みましょう——そして見ましょう

たとえあなたの息子が私たちのもとにいたくとも、すべての家々がしっかりとたっているのを

お母さん、泣いてはいけません

——勇敢でいてください！

19) Ebenda, S. 125. 訳出にあたっては、今井康雄、前掲論文、10ページを参考にした。

20) Ebenda.

21) Vgl. ebenda, S. 125f.

あなたから別れを告げて去って行った息子は、
もう帰ってきませんが、とくに知っています
あなたを一人にしたのではないことを！ (128)

こうして、子供や夫や父親が戦死した婦人らがつらい運命を孤独に耐えていることが決して忘れられてはいないことが、と同時に彼女らの息子、夫、または父親は「ドイツの祖国のために戦死した」のであり、その「英雄的な死が無意味なものではあり得ない」²²⁾ことが示唆されることによって、聴取者の「民族共同体」的な意識がより一層高められ、またそれを通じて、母親や妻もまた単に一兵士の母親や妻ではなく、「ドイツ人」の母親であり妻となり、その痛みが聴視者によって共有されたのである。

「国防軍のためのリクエスト音楽会」には、最初の5週間だけを見ても、およそ2,500万マルクのお金の寄付と、およそ29万マルクの価値の物の寄付が届けられた。²³⁾ 個々の寄付の中で高額なものとしては、帝国交通省の様々な部署によって集められ、1940年4月21日の第41回リクエスト音楽会の放送の際に戦争冬期救済事業に引き渡された100万マルクがあった。²⁴⁾ また、寄付者の中にはナチスの高官もあり、例えばゲッベルスは、放送局の訪問を機に、1,500台の国民ラジオを兵士らに寄付し、その中から西部戦線の兵士とポーランドの部隊に各500台が、海軍と空軍に各200台が引き渡された。²⁵⁾

さらに、寄付は「祖先の国から遠く離れた」(177)外国からも届いた。その一つのグループは、オランダ、スイス、ユーゴスラビア、デンマーク、ベルギー、ルーマニアなどに居住する在外ドイツ人である。例えば、オランダのドイツ人鉱山労働者は、42キロのコーヒー、340キロのカカオ、1,700枚のチョコレート、160キロの煙草、4,600箱の煙草、3,200箱の紙巻煙草、1,530着の衣類の積まれた貨車を寄贈した。(180) また、寄付には、例えば次のようなメッセージが添えられた。

国防軍リクエスト音楽会は、大きな熱狂をもって、私たちルーマニアのドイツ人にも聞かれています。もちろん、私たちが特に誇りに思うのは、私たちの慈善の贈り物の寄付の伝達です。グループはますます大きな業績へと拍

22) Ebenda, S. 127.

23) Vgl. B, 62 DAF 3 Awi-Ztg., 19235, S. 5. Bericht: *Rundfunk und Volksgemeinschaft*. Zitiert nach ebenda, S. 120.

24) Vgl. VB, 22. 4. 1940. Zitiert nach ebenda, S. 122.

25) Vgl. B, 62 DAF 3 Awi-Ztg., 19235, S. 5. Bericht: *Rundfunk und Volksgemeinschaft*. Zitiert nach ebenda.

車をかけられ、もうまたあなた方に慈善の贈り物を積んだ貨車をお知らせできます。(178)

前の日曜日に、私たちは、〈ルクセンブルクの〉「ドイツ・ハウス」でドイツ人街の共同の受信をしました。プログラムには、国防軍リクエスト音楽会がありました。私たちは拡声器のそばで数時間を朗らかに過ごし、故郷と勇敢な兵士と密接に結びつきました。リクエスト音楽会の終わりに私たちの寄付もアナウンスされたとき、私たちは特に嬉しく思いました。私たちは、故郷のために小さな貢献をしたことを、とても誇りに思いました。(178)

もう一つのグループは他ならぬ外国人であり、例えば、あるオランダ人の将校は、軍人らしい簡潔な報告の口調で、次のように伝えた。

私の寄付、500グルデン——私の願い、ドイツの100パーセントの勝利。(103)

こうした在外ドイツ人や外国人からのメッセージは、聴取者に真の「〈大ドイツ帝国〉」²⁶⁾で生きているという感情を喚起した。

「国防軍のためのリクエスト音楽会」は毎回、ハインツ・ゲデッケの次のような言葉で閉じられた。

国防軍のリクエスト音楽会は終わります。

いま前線が故郷に手を差し伸べ

故郷が前線に手を差し伸べました。

私たちはおやすみなさい、さようならと言います。

また次回お会いしましょう。

祖国がさようならと言います。(225)

オーケストラが奏でる『故郷、そこに再会がある』(*In der Heimat, da gibt's ein Wiederseh'n*)のメロディーとともに告げられるこの言葉は、「故郷と前線の架け橋」としてのこの番組の役割を改めて印象づけるものだった。

3. 書籍『国防軍のためのリクエスト音楽会を始めます』

以上のように見ると、前線や野戦病院での兵士らによる聴取、子供の誕生や兵

26) Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 249.

士の戦死に関するコーナー、音楽会の出演者などの主要な部分において、ラジオの「リクエスト音楽会」が映画『リクエスト音楽会』の基になっていることは明らかであろう。

ところで、実のところ、このラジオ番組そのものについては、十分な資料は残されていない。1936年から1938年までの幾つかのリクエスト音楽会のプログラムのゲラ刷りが保存されているものの、番組全体の録音も存在せず、協力者や寄付金の額などについては新聞雑誌の記事に頼らざるを得ないのが実情である。²⁷⁾ しかし、それではなぜ上記のように詳しい記述が可能になるのかといえ、この音楽会が『国防軍のためのリクエスト音楽会を始めます』(*Wir beginnen das Wunschkonzert für die Wehrmacht*) というタイトルで書籍化されているからである。それは、必ずしも「国防軍のためのリクエスト音楽会」の完全な記録とまでは言えないまでも、この番組の全貌を窺うことができる貴重な手がかりとなっており、この番組に関する上の記述や引用も、本書に多くを負っているのである。遅くとも1940年3月までに刊行された本書もまた、1942年までに35万部を売り上げ、大いに人気を博したが、それにもかかわらず、「リクエスト音楽会」に関する研究において、ラジオ番組や映画と比べ、ほとんど注目されてこなかった。しかしながら、「リクエスト音楽会」というラジオ番組に関する同時代のほとんど唯一のまとまった資料であると同時に、ナチス時代のベストセラーの一つであることを考慮すれば、詳しい考察に値しよう。

さて、本書の著者はドイツ放送局のアナウンサーで「リクエスト音楽会」の司会者ハインツ・ゲデッケとヴィルヘルム・クルーク (Wilhelm Krug)、出版社はベルリンとライプツィヒに居を置くニーベルンゲン出版社 (Niebelungen-Verlag) である。装丁は、後にコミック『ニック・クナッタートーン』(*Nick Knatterton*) で有名になった漫画家マンフレート・シュミット (Manfred Schmidt) が手掛けており、表紙は図2の通りであるが、本来カラーのイラストで、斜めに書かれたタイトルの文字を挟んで上半分が音楽会の様子、下4分の1ほどが兵士が宿舎のラジオで音楽会を聴いている様子となっている。本稿で底本としているのは1941年の第3版であるが、目次に沿って構成・内容を概観すると次



図2

27) Vgl. ebenda, S. 115.

の通りである。

ラジオ部門部長ベルントの序言 (7-10)	啓蒙宣伝省ラジオ部門の部長でドイツ放送局長のアルフレート＝インゲマル・ベルントによる序文。「民族と国防軍を一つの家族に結びつけ、8千万の人々を一つの大きな共同体の体験へとまとめ、すべてのドイツ人に力と帰属の感情を伸介する」(8) ラジオ番組の意義と、その「思い出の品」(8)としての本書の意義などについて。
誕生通知 (11f.)	音楽会の誕生を子どもの誕生になぞらえたごく短い導入。
冒頭のアナウンスに代えて (13-17)	著者二人による実質的な前書き。とりわけ数十万のリクエストの手紙が本書の基になっていることについて。
揺り椅子の男が思いつく (18-25)	聴取者の思いつきによる「冬期救済事業のためのリクエスト音楽会」の成立と、1939年3月の番組終了までの経過。
マイクに寄せる (26-29)	世界の「耳」、「口」、「仲介者」、「架け橋」(29)としてのマイクに、ハインリヒ・ゲオルゲが捧げた詩。
そして戦争が起きた (30-40)	前線と故郷からの手紙に応じたリクエスト音楽会開催に関するアルフレート＝インゲマル・ベルントの告知について。
民族全体の即興劇 (41-52)	第1回「国防軍のためのリクエスト音楽会」の開催について。戦死した兵士の母親のための「おやすみ、母さん」の放送の経緯や、野戦病院にいる兵士に娘の誕生が知らされたことなどにも言及。
……私がこんなにもあなたの近くにいること (53f.)	女優ケーテ・ゴルトが戦士の妻の名において読んだ言葉。
舞台装置の裏側 (55-66)	前線と故郷の架け橋としての本番組の役割を示す様々なエピソード。軍事的な理由からしばしば無味乾燥なものとなるアナウンスの背後にある様々な生と運命の存在を示す。
故郷の声 (67)	俳優グスタフ・グリュントゲンスが読んだ詩。
「息子たちは……のために生まれた」(68-76)	恒例のプログラムである新生児の誕生の告知について。最初の放送とそれに伴う寄付を中心に。
すべての新生児に寄せて (77-80)	ハインツ・ゲデッケが読んだ詩。
「こりゃ驚きだ」(81-90)	番組に関する聴取者の手紙や新聞雑誌のユーモラスな記事などの抜粋。
風変わりな願い (91-101)	音楽以外のリクエストについて。
犬を話題にする (102-113)	前線で部隊とともに戦った犬のエピソードと、それに伴う犬の寄付についてなど。
解放された「バルナバス」と狙撃兵「バガニーニ」が防空壕で演奏する (114-127)	兵士による前線でのコンサートの催しについて。兵士らによる新生児の母親のための給与金の寄付や、西部戦線の偵察隊による豚の寄付、およびラジオで娘の誕生を知った兵士のことなども。
泣かないで (128)	死者慰霊日に、俳優マティアス・ヴィーマンが戦没者の妻と母親に向けた言葉。

徒歩で、自転車で ——そして封鎖を横切って (129-147)	長距離ランナーの狙撃兵が往復300キロを走破して1,311マルク以上の寄付を集めたこと、下士官部隊の7人が西部戦線からリクエスト音楽会を目指して自転車で1,200キロを走破したこと、スカバ・フローの船員が5万マルクを寄付したこと、および封鎖を横切ってムルマンスクの港へたどり着いたロイド汽船「プレーメン」の乗組員への挨拶など。
集積所 ベルリン C2 (148-159)	リクエスト音楽会の寄付の中心地における新生児の母親への様々な寄付の引き渡しについて。
私たちに届いた手紙 (160-176)	上等兵、下士官、防空壕守備隊、砲兵、水兵、無線兵、騎馬伝令兵など様々な階級と部隊の兵士からの挨拶と、架け橋としての番組への感謝。
先祖の土地を離れて (177-181)	外国での視聴者について。スウェーデン人の聴取者からの手紙や、ロシア、ルーマニア、ルクセンブルクなどの在外ドイツ人からの寄付など。
さらに多くのソロ演奏者たち (182-215)	多くのソリストや芸術家らの写真、サイン、メッセージなど。映画と似た男女のエピソードも。
覚えているかい? (216)	分かれの言葉。
付録: 自分自身に関することについて (217-224)	著者ゲデッケとクルークによる自己紹介。
終わりの言葉 (225)	いつもの音楽会の結びの言葉。

このように、本書は、恒例の開会の言葉から始まって結びの言葉で終わり、その間に音楽会の様々な場面が挟まれることで、全体としてリクエスト音楽会の様子が再現されたものとなっている。ラジオを聴き、リクエストを書く兵士らの様子や、西部戦線の兵士による豚の寄付、子供の誕生と息子が戦死した母親に関するエピソード、多数の出演者の紹介などは、映画におけるコンサートの場面と一致している。また、映画との重なりという点では、「さらに多くのソリストたち」の項目で、映画の主人公たちと同じような男女の出会いが紹介されていることも見逃せない。それによれば、二人は1936年のオリンピックの間にベルリンで知り合い、短い夏の時間を共に過ごした。だが、運命が二人を離れ離れにし、その後3年間、彼らの間の結びつきは途絶えたままだった。ところが、戦争勃発後間もない10月のある日、リクエスト音楽会が重傷を負った軍曹の名をあげた。彼の同僚たちが、彼のためにラウドスピーカーを通じて歌の挨拶を贈ったのだった。丁度ドイツのどこかでラジオのそばに座っていた娘は、翌日ライブツィヒへ行き、オリンピックのときに知り合った男性と野戦病院で再会した。数か月後、リクエスト音楽会は、この二人の婚約に祝辞を述べた。聴取者らは、電波を通じて永遠に一つにされた若いカップルを、まるで二人が彼らのまっただなかにいるかのように祝福した。その後、新郎新婦は、ラジオ局に感謝の手紙を送ったのであった (Vgl. 185)。つまり、この男女の話は、ある程度映画のストーリーの下敷きと

もなっているのである。ここには、ラジオ番組から書籍化へ、書籍から映画化へという流れをはっきりと見て取ることができるが、それは、同一内容の異なる媒体による提供を通じて意図的に相乗効果を狙うメディアミックスともみなされるものであろう。

ところで、このようにリクエスト音楽会の雰囲気を再現する本書において、本文の記述に劣らず大きな役割を果たしているのが、多数の写真やイラストなどである。写真は全体で54枚だが、これに写真と同様の扱いを受けているスケッチ2枚を数えることができる。すべてモノクロであるが、ページ全体を使って複写されているものも多く、ユーモラスなコメントと合わせて読者の興味を惹く。内容的には、次のようなものである。

1) 演奏会の始まりと終わりを示すもの (2枚) (47, 210)

1枚は開会のファンファーレの演奏(図3)。もう1枚は最後の写真として置かれたトランペットを吹く兵士の様子で、演奏会の終了を暗示すると同時に、楽しい演奏会の後に待っている戦闘を予感させるとともに、「故郷に再会がある」(210)との言葉により、再会への希求や名残惜しさを醸し出す。



図3

2) 演奏会の舞台裏を示すもの (11枚)

(37f., 50, 59f., 79, 97f., 154)

舞台の隅に設けられた演奏会の「司令部」(50)や、モニター室、深夜のラジオ局、休憩中に煙草を吸うアナウンサーと出演者、山のようなリクエストの手紙を前に頭をかかえるスタッフ、その整理の棚や仕分けを手伝う子ども、沢山の寄付で溢れる集積所など。これら普段は目にするのできない演奏会の舞台裏は、読者に演奏会をより身近なものとする。

3) 演奏会を聴く兵士 (6枚) (9, 38, 47, 117f.)

前線の宿泊所や野外で、ラジオの周りに集まって兵士らが演奏会を聴いて楽しんだり、リクエストの手紙を書く様子や、兵士らがハーモニカやアコーディオンを演奏する様子など。その熱心さや楽しそうな様子は、故郷の読者に安堵感を与えたことであろう。

4) 子どもの誕生と母親への寄付 (4枚) (49, 70, 80)

ゲデッケが会場で子どもの誕生を読み上げる場面 (図4), 声をあげて泣く赤ちゃん, 1,000マルクの寄付の抽選の様子とそれを受けた双子。音楽会の前線との架け橋としておよび慈善的な意義を示すとともに, 子どもの誕生そのものが希望を示す。



図4

5) エピソードにかかわる出演者と聴衆 (5枚) (135f., 153, 194)

長距離ランナーの兵士や自転車乗り, 海軍大尉グリーンとその乗組員, ロイド汽船「プレーメン」の代表団など。

6) 演奏会の出演者たちの肖像や出演風景 (28枚) (27f., 107f., 187-209)

俳優, 女優, 歌手, ダンサー, 寄席芸人, 指揮者, 作曲家, バイオリニスト, 児童合唱団など。肖像写真もあれば, 舞台での場面もあり, 直筆のメッセージやサインが添えられているものも少なくない。

リクエスト音楽会はラジオによる催しであり, 会場の観客以外は直接目にするができず, 家庭での録音が可能であった時代, 番組の終了とともに過ぎ去ってしまうものであった。また, 前線兵士が音楽会の聴取を楽しむ様子や番組が製作される過程なども, 平素直に目にする機会はない。映画の『リクエスト音楽会』はそれらを目に見えるようにする一つの試みではあるが, それも映画館でしか見ることはできない。したがって, 書籍化は, 読者=聴取者がいつでも好きなときに音楽会を振り返り, 反芻することができるという意味で, ラジオ番組そのものや映画にはない意義が認められるが, その際, こうした多数の写真による視覚化は, 番組の再現という点で大きな役割を果たしたと言えよう。

ところで, 本書のもう一つの特色と言えるのが, 青字とカラーで印刷された部分である。本書では, 本文の内容に合わせたイラスト (44), 寄付の申し出の文面 (17, 一部は直筆の複写), 寄付の内容 (2), 出演者のメッセージとサイン (13) などが青字で印刷されている。イラストは, 全部で44あるが, その内容は, ゲデッケとクルークが赤ちゃんに見立てた本にミルクを与える様子 (11), 溢れるほどのリクエストの手紙を洗濯籠が汗をかきながら運ぶ様子 (13), 揺り椅子の男がラジオを聴きながらひらめく様子 (18), ラジオをチューニングする兵士とリクエスト

の手紙を書く兵士 (31), 前線の夫のことを思い浮かべながらリクエストの手紙を書く女性 (33), 航空兵からの寄付が戦闘機からの爆弾の形でラジオ局に投下される様子 (41), 野戦病院の負傷兵が子どもの誕生を喜ぶ様子 (46), 赤ちゃん (77), 平素仕事で使っていたドリルの音を聴いて楽しむ兵士 (96), 音楽の演奏を楽しむ兵士 (114), 豚をつかまえた西部戦線の兵士 (120), 自転車乗り (130), 集積所に集まる寄付のベビーカー (148), コンサートの様子 (182) などであり, いずれもユーモラスにコミカルに描かれている。

また, カラーで印刷されたページが2ページあり, そこには帝国労働奉仕学校からの寄付の手紙 (69) と子どもへの寄付の品物の絵 (70) が複写されている。加えて, 本書の表紙と並んで裏表紙もカラーで印刷されているが, そこには, 赤ちゃんとともに, バター, 手袋や靴下, ベビーカー, 哺乳瓶, ワインといった寄付の品々がラジオから兵士に向かって飛び出してくる様子が描かれている。

このように, イラストやサイン, およびカラー刷りのページも本書の重要な構成要素であり, 読者に親しみや喜びをもたらし, リクエスト音楽会をよき思い出として記憶し回想することに一役買っている。

4. メディアによる「民族共同体」の形成

さて, このようにドイツ国民の人気を博し, 書籍化, 映画化もされたリクエスト音楽会というラジオ番組の意義がどこにあったのかといえ, それはナチズムにおいて最重要課題の一つであった「民族共同体」の形成ということに尽きるであろう。つまり, 少なくともこのラジオ番組の放送の間は, ホールの聴衆と故郷の聴取者, および前戦の兵士が電波を通して繋がり, 一体感を感じることができたのである。そして, ここで特に注目に値するのは, 今井康雄も指摘するように, そこにナチズムが目指した「公的領域と私的領域の境界の解消」²⁸⁾が見られることである。つまり, 人々は自分たちが好む曲を家庭のラジオで聞くという私的領域での娯楽に興じるが, 同時にラジオはこの私的領域のただ中に「ドイツの社会主義」や「国民的連帯」を現前させることになるのであり, さらに人々は「リクエスト」²⁹⁾という行為によってこの疑似公共圏の形成に参加することにもなる。人々は, リクエストされるバラエティに富んだ音楽を楽しみながら, 息子を亡くした母親に同情し, 赤ん坊の誕生を喜び, 無事を確認している家族がいることに思いを馳せる。自分も苦しいなかで赤の他人のために寄付をしようという人がいることに, 心暖まる思いをする。そこに「民族共同体」が立ち現れてくるのである。

28) 今井康雄, 前掲論文, 9 ページ。

29) 同上。

しかも、それは必ずしも明示的なテーマとして働いているわけではなく、「民族共同体」のイデオロギーそれ自体が語られたり推奨されたりしているわけではない。むしろ、ここで推奨され促進されるのは、「ある種の知覚のあり方」³⁰⁾である。例えば上にあげた「おやすみ、母さん」が喚起するような一見「自然」に見える知覚——母を思う息子、息子を思う母、故郷を思う人間——をなぞるとき、「民族共同体」は擁護すべき現実として、祖国の勝利のために苦難をしのいでいる「我々」³¹⁾自身の姿として立ち現れてくるのである。

ところで、このように見ると、リクエスト音楽会を通じた「民族共同体」という擬似公共圏の成立が、この時代に普及したラジオというメディアの特性に拠るところが大きいが分かる。その一つはリクエストを通じた自発的な参加である。佐藤卓己によれば、ファシスト的公共性とは、大衆が運動の中に「参加」と「自由」を感じる社会関係であるが、それは何よりもラジオによる「〈社会的動員〉」³²⁾によってもたらされた。ラジオは、「〈財産と教養〉」というブルジョア的公共圏の壁を打ち破って、「〈言語と国籍〉」を入場条件とする国民的公共圏を成立させ、「〈理性的な討議により輿論を生み出す読書人のブルジョア的公共性〉」に代わって、「〈参加感覚とその共感により世論を生み出す社会関係〉」³³⁾をもたらししたのである。もう一つは、場所的な障碍を克服する「〈広播性〉」³⁴⁾である。つまり、数百万人の聴取者に、彼らがどこにしようと、また催しの場所がどこであろうと、帝国の隅々に至るまで、「電波で結ばれているという一体感」³⁵⁾をもたらししたのである。また、この関連では、出来事そのものよりも、むしろラジオによるその仲介が特殊な体験を生むという点に、ナチスのメディア演出の秘密があるとの指摘にも注意を払わねばなるまい。³⁶⁾人は、例えば党大会に出席できなくとも、ラジオによる仲介を通じて、他の多くの人々とともにその行事に関与し、総統の言葉に耳を傾ける。そのとき、人々は一人一人がそのイベントの一部となり、ナチズムの理念の具現となる。この瞬間、人々はまさに「民族共同体」を体験するのである。

そして、ここで今一度問われねばならないのは、そのような聴取者としての大衆の自発的な参加が、まったく自然発生的になされたものなのかということであ

30) 同上。

31) 同上。

32) 佐藤卓己「ラジオ文明とファシスト的公共性——『キング』の時代』の射程」(『アジア遊学』第54号、2003年、51-58ページ)、55ページ。

33) 同上、56ページ。

34) 川島真「満州国とラジオ」(『アジア遊学』第54号、2003年、33-42ページ)、37ページ。

35) 同上、40ページ。

36) Vgl. Uta C. Schmidt: A. a. O., S. 17.

る。例えば、すでに述べたように、書籍でも映画でも取り上げられ、聴取者・読者・観客に情緒的に働きかける、息子が戦死した母親のエピソードの発端は、リクエスト音楽会の放送中にその母親からかかってきた電話であった。アナウンサーのゲデッケはそれを思いがけない出来事として番組に挿入し、ヴィルヘルム・シュトリエンツの歌う『おやすみ、母さん』が流れる間、聴取者には、ドイツの数千人の母親が、それぞれの家で、一人でラジオの前に座り、前線にいる息子に思いを馳せる姿が思い浮かぶ。このとき、戦死した息子についての一人の母親の悲しみは、メディアによって演出された「民族共同体」のすべての母親の愛国的な犠牲を代表するものとなる。

だが、リクエスト音楽会という番組は、実際にはそれほど自由な変更や追加のきくものではなかった。というのも、それは啓蒙宣伝省と国防軍による「厳しい検閲」³⁷⁾の下におかれていたからである。放送内容のチェックのため、啓蒙宣伝省においても、放送日の3日前までにプログラムを提出することが義務づけられていたし、³⁸⁾ 国防軍においても、「マイクの前で話されるテキストは、事前に確定され、国防軍総司令部の国防軍プロパガンダ課に呈示されねばならない」³⁹⁾と定められていた。そこでは、聴取者などにわかに素性が確認できない人物からの手紙や電話を利用することは明確に禁止されていたのである。⁴⁰⁾ こうした点を考慮すれば、問題の母親の電話もまた決して予想外のハプニングではなく、最初からプログラムとして準備されたものであったとみなすのが妥当である。言い換えれば、それは決して自然発生的な出来事ではなく、周到に練られた演出だったということである。

しかし、それにもかかわらず、多くの子供、夫、父親が戦死するという現実を前にした当時の聴取者にとって、それが演出かどうかということなど取るに足らない問題であったこともまた事実であろう。そもそも、彼らにとって、リクエスト音楽会が決して文字通りの催しではなく、リクエストが決して自由に開かれたものではなかったことは、周知の事柄であった。ユダヤ人の作曲家や作詞家に由来する曲はもちろん、アメリカのジャズや共産主義的・社会主義的な内容の曲のリクエストが叶えられないことは、暗黙の前提だったのである。この意味で、ラジオはひとつのコミュニケーションの共同体への加入の手段であると同時に、排除の手段でもあり、それによって演出された民族共同体は、政治的・人種的に制限されていたのである。実際、ユダヤ人には、ラジオの所有も聴取も禁止されて

37) Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 138.

38) Vgl. Diller: *Rundfunkpolitik*, S. 342. Zitiert nach ebenda, S. 124.

39) Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 138.

40) Vgl. Ebenda, S. 136.

いた。⁴¹⁾したがって、そのような聴取者の理解の下に番組が成り立っていたという意味では、聴取者のリクエストと実際に演奏された曲との間にそれほど大きな差異はなかったとも言える。と同時に、娯楽的な曲の間に挿入される『おやすみ、母さん』といった曲や「お母さん、泣いてはいけません」といった詩の中に、銃後の女性の理想的な姿が忍び込まれたのであった。⁴²⁾ 同ような国家による管理と観客者ないし読者による了解が、1934年2月16日に発布された「映画法」(Lichtspielgesetz)の下で、製作から上映まで入念な「検閲」(Prüfung)を受けた映画『リクエスト音楽会』と、啓蒙宣伝省ラジオ部門の部長でドイツ放送局長のアルフレート＝インゲマール・ベルントの発案によるという意味で、明らかに啓蒙宣伝省の企画である書籍『国防軍のためのリクエスト音楽会を始めます』にも該当することは言うまでもない。⁴³⁾ このような意味で、リクエスト音楽会を通じて形成された「民族共同体」は、自由でないことを了解した上で、聴取者と国家の共同作業によって成立したものであったのである。

おわりに

このように人気を博した「国防軍のためのリクエスト音楽会」は、全部で75回放送された後、1941年5月25日の放送をもって終了することになったが、その主な理由は、戦局の悪化に帰される。というのも、1941年6月には東部戦線でソ連との戦いが始まる一方、ドイツ本土でもイギリス空軍による北ドイツの大都市の爆撃が始まり、また、番組の製作にかかわる人々が国防軍や部隊の慰問のために動員されるようになると同時に、在外の著名な芸術家の招聘も難しくなり、番組を従来のまま維持することが困難になったのである。

その意味で、この音楽会は戦況がよい時代の産物ではあった。しかし、いずれにせよ、この音楽会が、「〈今前線が故郷に手を差し伸べ——また故郷が前線に手を差し伸べる〉」⁴⁴⁾というモットーの通りに、互いに離れている聴取者を結びつけ、メディアによる「民族共同体」の形成に一定の成果を収めたことは間違いあるまい。その意味で、ナチズムとメディアのかかわりを解明する上で、ラジオ番組はもとよりその書籍化や映画化を含めて、今後より詳しい分析が求められよう。

41) Vgl. Uta C. Schmidt: A. a. O., S. 17f.

42) Vgl. Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 127f.

43) 飯田道子『ナチスと映画 ヒトラーとナチスはどう描かれてきたか』中央公論新社、2008年、51ページ参照。Dazu vgl. auch Christian Adam: A. a. O., S. 110f.; Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 168.

44) Hans-Jörg Koch: A. a. O., S. 250.

Das „Wunschkonzert“ in der NS-Zeit

—Die Gestaltung der „Volksgemeinschaft“ durch die Medien—

Ken-ichi TAKEOKA

Das „Wunschkonzert“ wurde in der NS-Zeit zuerst als Rundfunkprogramm populär und wurde dann als Buch zum Bestseller und gewann danach als Film die zweitgrößte Zuschauerzahl unter den zeitgenössischen Filmen. In dieser Abhandlung wird dieses „Wunschkonzert“ ausführlich untersucht, um den Prozess der Gestaltung der „Volksgemeinschaft“ durch die Medien klarzumachen.

Im ersten Abschnitt kommt der Film „*Wunschkonzert*“ (1940) in Betracht. Es wird bestätigt, dass das gleichnamige Rundfunkprogramm für die Entfaltung der Handlung dieses Films eine wichtige Rolle spielt, und dass auch die Aufnahme dieses Programms in dem Film gebraucht wird.

Im zweiten Abschnitt wird das Rundfunkprogramm „Wunschkonzert“ (1936-1941) genau betrachtet. Dadurch werden die näheren Umstände der Entstehung, die Häufigkeit der Sendung und deren Zeitrahmen, die Eigentümlichkeiten, die musikalische Wünsche und Spenden umfassen, die Inhalte der gewünschten Lieder und der Spenden, die Rolle, die das Programm im Zweiten Weltkrieg als „Brücke zwischen der Heimat und der Front“ gespielt hatte, usw. untersucht.

Im dritten Abschnitt wird das Buch „*Wir beginnen das Wunschkonzert für die Wehrmacht*“ (1940) behandelt. Durch die Betrachtung von Struktur, Inhalt, vielen Fotos und Illustrationen usw. wird bestätigt, dass dieses Buch für eine Reproduktion des Rundfunkprogrammes gehalten werden kann.

Im vierten Abschnitt werden zuerst die folgenden Aspekte behandelt: der Zusammenhang zwischen dem Rundfunkprogramm, dem Buch und dem Film; ihr propagandistischer Charakter; die Rundfunkpolitik der Nazis, wie die Verbreitung des Volksempfängers und das Angebot der unterhaltenden Programme; die Charakteristika des Rundfunks, wie die Teilnahme der Zuhörer und der von der geographischen Entfernung nicht beeinflusste Charakter. Dann wird klagemacht, dass die Bedeutung des Rundfunkprogrammes „Wunschkonzert“ in der Gestaltung der „Volksgemeinschaft“ besteht. Dieses Programm bildet während seiner Sendung einen öffentlichen Raum, in der das Publikum in der Konzerthalle, die Zuhörer in der Heimat und die Soldaten an der Front durch die Funkwellen miteinander verbunden sind. Aber sie ist nichts anderes als die „faschistische Öffentlichkeit“, die durch die Kooperation der anerkannten Zuhörer und des NS-Regimes zustande kommt, weil sie unter der Zensur des

Propagandaministeriums und der Wehrmacht steht, und weil sie von den Einschränkungen wie dem Verbot des Empfangs durch die Juden begleitet ist.